Akita University

秋田大学教育学部研究紀要　人文科学・社会学科　第49集　pp. 1～16.　1996

「た地名」考（後篇）

――水田の成立過程とその名――

A Study of Place Names "Ta". (2)

――the origin of ricefield, and their names――

井上　章

Akira INOUE

序　論

「た地名」考は、とりあげるべき地域・地名が多いので、前・後二篇に分割した。小論はその後篇であるから、序論として特に述べるべき事はないが、いささか断っておきたい。前篇において、「『た地名』は特定地域に集中しているので、その地域を一括して述べる」という方針で臨んだのは、必ずしも成功しているとは思えない。この方針で書いてゆくと、その地域の地形がクローズアップされる長所はあるが、同一地名が各所に散らばって取りあげられるばかりか、一括した地域以外からも例が見出され、論証から省くのが惜しまれることが多く、結果的に、地域別に一括する方針を崩してしまう場合も多かったからである。しかしながら、小論は後篇であるから、前篇の方針を変えるわけには行かない。結果的に一括して述べる地域以外に言及することが多くなるであろう。それとともに、「た」以外の地名にふれて総合的に見るケースも多くなるであろう。相互に関連する点が多いからである。

なお、前篇中に結論に相当する内容も既に出ている。後篇は、前篇で述べた事を仮説としてその実証に当る場合も多いことを断っておきたい。

本　論

第四節*（前篇からの通しで記す）山陽地方（兵庫*・岡山・広島の三県―兵庫*は一般には近畿に入れられるが、地形的には山陽続きである。）

この地域の地相の共通性は、いろいろの資料に述べられているが、たとえば「日本の自然6　中国四国」（岩波）によると、

中国山地の脊梁部は、兵庫・鳥取両県境にそびえる氷ノ山1510m・三宝山1358m、兵庫・岡山県境の後山1252m・津黒山1118m、蒜山1202m・毛無山1218mなどを連ね、さらに西南西方面に花見山1188m・道後山1271m・立烏帽子山1299m・琴引山1013m・阿佐山1218m・臥龍山1223m・恐羅漢山1346

Akita University

m・冠山1339mなどの山山が連続する。これらの山々は高さが1100～1350m程度に揃っているとともに、全体としてかなりなだらかな山容を示している。…中国山地脊梁部の北側および南側には海抜600m程度の高まりをなす高原状の山々が分布する。…また瀬戸内海に近い地域には300m以下の低い丘陵状の土地が広く分布する。…これらの地形面は長期間の侵食によってなだらかになった土地が、その後の地盤運動によって隆起し、現在の高さまで持ち上げられた「侵食小起伏面（平坦面）」とよばれる土地であると考えられている。…中国山地で古くから行われてきたたたら製鉄は、この中国山地の花崗岩地域を中心に花崗岩や閃緑岩の風化したマサから採取した磁鉄鉱を原料として鉄穴流しという方法で行われていた。（P2～P5）

のように、地質・地形上の類似が、その成立を含んで述べられている。詳細にはまだ外にもあげられるが、今はこれにとどめておく。ただし、一つ断っておきたいことは、右の説明（波線部）にある「山容がなだらか」という点である。これは地形を大局的全体的に見た表現であって、そのまま微地形には妥当しない。即ち、右の説明にもあるとおり、当地方の一大特色である地質（風化花崗岩＝マサ）が原因で、大小の崖崩れ跡があることであり、これは詳細な地形（五万分の一・二万五千分の一など）で山の斜面を見れば、当地方には幾つも見出すことができ、現在でも多雨の季節に新しい崩壊によって災害が頻発している。上述の事は、崩壊・剝落を意味する「アキ系地名」に論じたとおりである（本紀要第43集）。これは全体的に言えば、山頂付近は傾斜がゆるく（前記「なだらか」が妥当する）、あまり崩壊は起らないが、山麓部は比較的急斜面が多く、ガケ崩れが起こりやすい。「た地名」は、前篇にも明かにしたように、山麓部から下の低地にかかわる所に多い地名であるから、右の「日本の自然6」の説明中、「全体的になだらかである」という点よりも、「マサ土に基く崩壊」の方に重点をおいて考えるべきである。これに類する事は、畝傍山・耳成山に比べて香具山を論じたとき、香具山はよく「山容がなだらか」と言われる。確かに全体的に見れば頂部の傾斜がゆるく曲線的で、浅い器物を伏せたようにもたとえられる。しかし現実には侵食が進んでいて赤土面の露出などあり、山麓はむしろガケ山というべき急傾斜であることを述べた（本紀要第44集）。そのように自然の地相は一律単純ではなく、その地名を考えるとき、「どういう点をとりあげてつけた地名であるか」に注意を要する。そして、「どこに目をつけた地名か」は、同じ地名を体系的に広く見続けなければ浮かび上がってこない。

では中国地方の「た地名」にはどんなものがあるか、例をあげて行くが、紙面の都合上、説明は簡略にせざるを得ないことを断っておきたい。

一、兵庫県

a、宝塚（兵庫県宝塚市）。六甲山地のほぼ東端。線状に崖（落差）が続く点は、今年の兵庫県南部大地震の発生源活断層と無関係ではあるまい。町の中心部武庫川沿いは北西―南東方向はほぼ平らであるに対し、その直角方向、特に北東方向はすぐに傾斜が強くなり、程なく岩崖面が切り立った台地に至る。台地の上は、今は高層アパートや住宅が立ち並んでいるが、この岩肌をあらわにした台地壁面は、一度見たら忘れられない強い印象を与える。反対の南西側も岩倉山489mが迫っているが、こちらは崖が少なくて、麓から市街化が進み、山に這い上っている。いずれ、宝塚は山・台地の起伏が激しく、述べてきた「た地名」の特色と一致している。

なお「たから」の語構成で、中心的意味は「た」にあり「か・ら」は、それぞれ様態性を表す形式名詞および接尾辞であろうが、二つ合して様態性語尾とも見え、また見方によってはタカが結合して意味の中心を担い、それにラがついたとも考えられる。後者の考えの場合は、特に、タカに「高」の意をあてて取りたくなるが、筆者は「高」という

Akita University

抽象観念的意義より、険しさに通ずる「猛・武・畏・威」の意だと考える。「宝」地名については特に後述の「島根県大宝」「大分県宝山」参照のこと。

b、武田尾（タケダオ）（兵庫県宝塚市）。前記「宝塚」の北西6㎞。複雑な岩崖面の谷間で、武田尾駅はトンネルにはさまれて谷の上にかかるような位置にある。駅の北4～5㎞の所に古宝山（コタカラ）459ｍがあり、山相は特に頂部に岩崖の露出が多い。

タケダの表記で漢字は「武・竹」が多いが、ここは武田尾である。大分県には竹田市がある。こちらで概説すると、阿蘇山の東側の谷川をすべて集めた合流点が竹田であるが、谷川の侵食にとり残された間は尾根・岬状になって竹田市街に至る。この尾根の岸は急崖である。「荒城の月」の曲の想を得たとも言われる「岡城」も、そういう地形の中にあり、絶壁で囲まれている。

兵庫の武田尾も崖地である点は共通である。なお西日本は「タオ」（ヲ）で峠を表すのに従えば、ここにも当てはまるように見えるが、武田尾を特に山越えの峠道として見るべき積極的理由はない。

c、長田（ナガタ）。兵庫県神戸市長田。現在の町部は平地であり、また市街地になる以前に水田が作られていたかも知れないが、背後（北側）に前述の六甲山地が続き、この急斜面の下に続く平地であると共に、この山地を刻み分けた大きな谷に沿うのが長田である。現在は山麓から1㎞余離れているが、地名は六甲山麓・谷筋の長く続いた急傾斜地（た）が長田の原義と解したい。地名が人の生活地域の方に引き寄せられた例であろう。

d、多紀郡（タキ）。篠山町、丹南町などを擁する兵庫県東部の山中である。当郡中の「瀬利」については「崩壊土が川によって堆積された意のセリ（迫り上り）として論じた事があるが（本紀要第47集）、そこでも述べたように、当地は侵食谷が多い。現に、当郡内の川に「四十八滝」をはじめ「滝」と「滝地名」が多く、そこ全体が「多紀郡」なのである。こういうことが「共通地相内でその地相を表す地名が多く見出される＝集中」の好例であることは言うまでもない。また同郡に「谷（タニ）」地名が多いこともあげておかねばならない。

e、多可郡（タカ）（兵庫県中部の山間地）。この郡にも「田」がつく地名が多いが、多くは水田としてみるのは不適切に思われる。

さて、多可郡から離れるが、兵庫県下には、淡路島に多賀（タガ）町（津名郡一宮町多賀）がある。ここは日本書紀にイザナギ神が神鎮まります所と伝えるが、地相はこの伊弉諾神宮の裏手の山が甚しい侵食相を示し恐ろしい感じの谷である。一般に地名の意味は「高」の意と説かれ、筆者も裏手に高い所がある事を否定しないが、単に抽象的・観念的に「高」の意味なのではなく、先にも述べたとおり「猛・武・畏・威」など宛てるにふさわしい地相こそ名づけの根拠（＝真義）だと考える。それがまた「た地名」の共通意義なのである。

f、なお兵庫県は、播磨平野の西部から瀬戸内海岸（姫路市周辺）にかけて、玉手・田井・太田・高田・高野・龍野・谷田部など課題の「た地名」がある。更に古代史上の記載地名も多く、注目に価する。

なお、飾磨郡家島町の男鹿（だんか）島は特に注意を要する。男鹿島は播磨灘に浮かぶ40余島より成る家島諸島の一つである。男鹿島は周囲10㎞で湾入の少ない円形の島であるが、南端を除いて花崗岩から成り、その海岸は殆どが岩壁である。面積の割に高さは220ｍあって周辺の島より高く、かつ起伏が大きい。

男鹿の名については雄鹿に結びつけた説話風の話がある（播磨鑑）が、付会である。

ここに特に注目する理由は、崖下に崖から続いた浜が「田ノ浜」と呼ばれ、ここには古代ヤマト国の時代と考えられる遺跡があって、「た地名」の古代との結びつきの強さが想像されるからでもある。

Akita University

二、岡山県

共通的地相については先述したので、直ちに具体的地名をあげる。

a、田地名

ア、小田（オダ）（小田郡矢掛町）。「山に囲まれた小盆地であることによる」とされるが、周囲の山に急崖が多い点を見逃してはならず、当地の川も矢掛町付近を小田川といった。川の相は侵食が強く、小田は合流点に当り、川の水音のある所である。

イ、小田郡（オダ）。岡山県南西部を占め、一般には低平地と説かれているが、特に郡の北部は丘陵に接していて、丘陵麓部には崖が多い。「小田」の地名は、鏡野町小田村（そん）・倉敷市の小田村（そん）あり、後者は小川・柳田・稗田の三か村が合併したとき、一字ずつとって合わせた合成地名であるから、本来の「小田」の証にはならないものであるが、もともとの地形が「た地名」の共通的類似の中にあるから、合成名も全体的共通相によく当っている。従って小田の例をあげても違和感がない。

ウ、田町。熟語形でないから、むしろ先に述べるべきか。

i 岡山市田町。江戸期よりの新しい地名で、もとは田畑であったからと言われるが、起伏のある地形である。

ii 津山市田町。ここももと田地であったからと言われるが、津山城の西に位置し、その台地につながるもので起伏のある地形である。

b、玉地名

玉地名は既に前篇「和歌山県」にも述べたが、当地方では倉敷市（尾根筋が達している）から瀬戸内海に突き出た半島で小丘が複雑に続いていて、それら丘陵の麓部は共通的に崖相をもっている。そこに玉（タマ）地名がある。

ア、i 玉（タマ）（玉野市）。次にあげるように熟語地名ができたが、玉は中心になった語形である。「玉」は臥龍山・茶ドラ山にかこまれた丘陵地。

ii 高梁市玉・玉川（玉田川（谷））。出水のたびに水が溜ったとされる山間の川。両岸はガケ（これがタマの中心の意味）。高梁市玉の集落はこの川の岸に並ぶ。川は今は水量が少いが、多雨の後はあばれ川の相を現す。

iii 吉永町多麻。美作・播磨の分水界の当り、侵食崖地である。

イ、玉原（玉野市）。「玉の奥にあって広々とした原」という説があるが、「玉」地形のままで広いのである。全体が玉（ガケで構成された丘陵）の連続なのである。

なお同地域には、もちろん同様の地形で倉敷市側に続く所に「滝・田加・田の口」などのた地名がある。

c、陀阿（ダア）（岡山県苫田郡加茂町陀阿）―陀阿については地名辞書等にも説明されていない。よって自分の考えで説かざるを得ない。

まず「阿（ア）」がつくのは、一音節語の母音を延ばしたもので、西日本の一般的な発音法である。地名の上でも「木（紀伊）・火（斐伊）」の類がある。次に語頭の「陀（ダ）」は「た地名」の濁音形と考える。一般に語頭濁音は東北・北陸あたりに多いと言えるが、地名の上では必ずしもそうとばかりは言えない。

岳ダケ　青森県岩木町
　福島県安達太良山の東麓。
　山口県美弥市
　香川県三木市
　宮崎県高千穂町
抱返ダキ（滝）カエリ↑タキ
　秋田県田沢湖町
　同　同　小坂町
　福島県只見町
　同　檜枝岐村
玉ダマ　和歌山県紀伊田辺市

Akita University

同　南部川村

ダンゴ↑タコ

山形県南陽市高畠町駄子町

東京都文京区団子坂

最後のダンゴなど、今述べている「た地名」に該当するか一抹の不安はあるが、筆者は自然地名としての「た地名」であると信ずる。ところで、右の濁音形はやはり東北に多い。しかし、「岳」の山口・香川・宮崎、「玉」の和歌山と共に、この「陀阿」も岡山に、語頭濁音があると言うべきで、語頭濁音地名は東北だけのものでないことは確かである。

こうして、言葉の上では「陀阿（ダア）」とは「た地名」の「た」の濁音形の延引形と考えられるが、清音の例とどう違うのかについては、必ずしも明らかでない。一般的には濁音形の方が「指大（コロコロ―ゴロゴロ、ホロリ―ボロリ）強意（ハタと―バタと、キュッと―ギュッと）・敬意・畏怖（チチ―ヂヂ、ハハ―ババ）、軽蔑（サマーザマ（様）、アサムーアザム（浅））」など指摘できるが、「た地名」を濁音にしてどのような効果があったのであろう。ある程度言えるのはやはり「指大・強意」あたりであろう。たぶん水音の強い相ではあるまいか。

以上のように考えた上で現地を検証する。「陀阿」は苫田郡に属し、岡山県中央部よりやや東寄りの最北部で、倉見川・加茂川などが合流する山間地帯である。この支流のほとりに陀阿があり、その数km下流には「百々（ドウドウ）」という滝状の水音をいう地名もある。この支流をはじめ、一帯の地形は谷がきれ込んでいて、現在は水量があまり多くないので水音も大したことはないが、かつては大きな水量のもとに、大きな水音があったと考えられる。滝状の水音地名であることは確かめられた。

三、広島県

共通地相については前述したので、直ちに個々の地名に入る。

a、ア、大田（オオタ）（尾道市太田）―尾道は北から南に大小の尾根筋（間に川）がある地形である。尾道市郊外の太田も概略としてはそのような地形の所である。風化花崗岩質の上流部は小丘陵地であるが、複雑に侵食されて土ガケ面が多い。太田は小さな川のほとりにあるが、麓が急斜面の丘陵に囲まれて、流れに落差のある所（今はコンクリート河床）が太田集落であり、ほぼここからは水田が開けている。当地は、上流側が特に傾斜が強く、その流れを囲んでいるので、水田面はちょうど箕か塵取状ともたとえられる面にある。水田はあるが、その意味としてみれば「この程度の広さで太田とは？」と思わざるを得ない。しかし、急斜面・段差に水田が続いている点など、既述の太田に一致している。

イ、大田川（オオタ）　広島市、および上流の山県郡戸河内・加計の両町など。広島市のある平地部は、この太田川の河口三角州であって、この川なくして広島市はありえない。ここが非常に特徴的なので、太田川の相も、この低平地で見られやすい。現在は都市化が進んだが水田であった所も多いので無下に否定できないが、上記のようにずっと上流部から太田川と呼ばれている点も考慮に入れると、水田によって太田と呼ばれているのではないと考えた方がよい。では、上流部はどんな川相であるか？

「荘園志料」によると「太田荘（は）郡中（の）戸河内・上中下筒賀・上下殿河内・加計・津根・坪野・穴・長笹・戸谷（の）十二村の大名」とあるが荘園としての徴証はないとされる（角川日本地名大辞典・広島県）。

この地域の地形的特徴は太田川両岸は崖状で川底にも岩があって水音のある所が多い。これは加計の辺より上流部の太田川本流が多くの曲折をもつに加えて、嶮しい山間の谷間を形成している多くの支流が流入し、全体で嶮しく複雑な曲折した川相をもつことである。洋々と

Akita University

流れる広島市付近とは大違いである。この点は、東京の多摩川とよく似ている。この多摩川の名も上流部の丹波（タバ）と同じ「た地名」で、岸の崖・河床の落差・水流の音によってついた名と考えるべきである。平野・都市部の悠々たる流れは「た地名」の本意ではない。

ウ、小田（オダ）（賀茂郡河内町）

沼田川の支流箱川（ハコガワ）が鋭角に曲ったところにダムが作られている。小田はその曲がり角の外側に落ちる小川筋に当りガケに囲まれている。

エ、大竹（オオタケ）（大竹市）広島県最西端で瀬戸内海沿いの市である。古くは「大滝」とも言ったという。この名はいわゆる地名伝説めいた「竹が多いから」という説があるが、やはり地形をよく見るべきである。

当地の川、小瀬川は、河口近くになって山に当り鋭角に曲って迂回する上に、その上流部にも弥栄峡・三倉岳県立自然公園などがあって、起伏の多い土地相を示している。この相は述べてきた「た地名」の特徴と一致している。

この外、広島県も「た地名」が多く、名のみあげると、江田島・高田郡・甲田町・竹原市・高野町などである。

第五節　山陰地方（鳥取・島根の両県）

全般的地相については山陽に準ずる。ただ中国地方において、脊梁山脈である中国山脈が北側に偏り、従って鳥取・島根両県は全体に北への傾斜が強い地形である。特に山脈が海に近づいているのは西部で、島根県の西半は山口県に続いて山が海に接している。

一、鳥取県

ア、小田（オダ）――小田村・小田大谷＝小田川の上流で、ここが後に小田村小田となった当地の中心地である。

イ、尾田（オダ）（倉吉市）湊町は田町である。大山（ダイセン）の裾野が東に広がってできた天神野台地を南北に横切り、北谷川の右岸から小さい谷が南に伸びる。その谷頭に位置する。

ウ、田後（タジリ）（東伯郡羽合町）

田尻とも書く。天神川右岸。かつては氾濫原で起伏ある地形。スサノヲ神をまつる大宝天王神社あり。

二、島根県

ア、丹波（タンバ）（島根県太田市五十猛町）

両側を尾根状の丘陵に挟まれて、小さな川を中にし、水田が作られている。確かに京都府丹波地方に似た地相である。東京の多摩川の上流は「丹波（タバ）」であるが、京都府・島根県のは、下の濁音バに伴う鼻音が独立してタンバである。

イ、宇丹波（ウタンバ）（能義郡伯太町上十年畑）

右の島根県の丹波に比して全体の規模が大きい。尾根状の山に挟まれている点は同様であるが、水田が営まれている最奥地に当る。中心の水流は滝状になり水音を立てている。両側の山より流下する支流の小川も急流で降雨時などは滝となる。この周囲の山は水源涵養地帯として保護されている。宇（ウ）は大の意に当る例であろう。

宇佐　宇多

ウ、丹後坂（タンゴ）（島根県佐野町―郡賀郡金城町）

両町の境の坂（サカ）で、急傾斜。もちろんこの後（ゴ）は「国を二分して都から遠い方をさす」のではなく、従って対立する丹波・丹前などはない。ついでに言えば、京都の丹後（タンゴ）は本来的に「後―遠い方」の意味ではなく、タゴ地名であると解したい。丹波を二分したとき、ちょうど都から遠い方に当っているので、掛詞のように「後（ゴ）」を宛てたものであろうと考える。

エ、反部（タンベ）（簸川郡佐田町）

Akita University

神戸（カンド）川と須佐川との合流点にあり、西方に高櫓山がそびえ、山城があった。地名の説としては、田を耕す者が住んでいたという意の田部が転じたというのがあるが、これは証がない。「た地名」としての「た」に所を表す「部（ベ）」がつき、濁音に伴う鼻音が独立して「たんべ」となったと考えたい。須佐別宮が高櫓山麓にあり多倍神社に合祀された。川岸も崩落の多い崖である。

オ、丹部（タンベ）（能義郡伯太町）

伯太川ぞいの侵食地形地である。伯はハカ・ハキ・ハク・ハケ・ハコの体系をもつ。前項「反部」に類似。

カ、小田（オダ）（島根県簸川郡海岸）島根県中央部の海岸で、特にこの辺より西において山が海に迫っている。海に向って階段状の所があり、その落差のある下は水田で、ここへ上から流下する小さな流れは複雑な侵食のあとを示す。

キ、多伎（タキ）（田儀）簸川郡多伎町。右の小田の西5㎞ほどの所で、地の起伏はいよいよ強くなり、駅付近も道路が崖をめぐって曲折・上下するなど、古語の「たぎたぎし（当麻）」が思い合わされる所である。

ク、大田（オオタ）（大田市）

丘陵に囲まれ、市街地にも山が入り込み、道路も高低差をもって屈曲している。入り込み迫っている丘陵の周縁の傾斜は強く、山かかぶさってくるような感じである。これらは既述の「太田」によく合っている（前篇　茨城県・群馬県の各太田市参照）。

ケ、太田（オオタ）（江津市）

広い水田を前にしていることはいる。しかし奥（周縁）は小高い丘が続く。ほぼ同高度の丘が、壁のように連なっている。この壁状の丘の下に道が沿い人家が並ぶ。ここが太田である。よく見ると岡は岩（砂利）まじりで崩壊し、すぐ下の民家を脅かしている所もある。広い田圃はあっても、それだけで太田なのではなく、隣り合わせに崖があり、多くの場合はその崖からの土砂崩壊が下の平地（田）を作ったのが太田なのだ。この江津市の太田は、この崖から下の低地が作られたとは考えにくいが、崖と田とが隣り合って組みとして見られる点は同じである。

コ、大宝（オオタカラ）（島根県飯石郡吉田村大宝）有名な斐伊川の上流である。川筋に沿って行くと「大宝」の表示があって川の対岸に渡って行くべき事を示している。その対岸が恐ろしい程の崖で、この面の傾斜は垂直に近く見えるほどで、その下をすり抜けるように行くと、やはり急斜面の山に囲まれた大宝（オオタカラ）集落がある。ここの周囲は崖ではないから心が安まるが、周囲が山なので日没は早く日の出は遅い。「宝」地名はこのように激しい高低差のあるところである。（兵庫県宝塚。大分県宝山など参照）。

サ、田万（タマ）川（山口県阿武郡）　島根県を越えて山口県に入った所に北流して日本海に注ぐ田万（タマ）川がある。ここは阿武郡で、全体が侵食等の起伏の多い山地である。

この田万川に近いＪＲの駅は江崎駅であるが、次の駅は須佐で、本紀要第47集に述べた侵食・崖海岸で有名な所である。川岸が急崖である事はタマ川の共通点である。

シ、田町（浜田市・大社町）

浜田市は山陰海岸で浜田川河口の都市である。実は浜田自体が「た地名」であって小さい河口平地はあるが山が海に迫っている。田町もその中にあって、岸が崖状である。

大社町は有名な出雲大社のある町で、この宮が背後に丘陵を背負っていて、田町もその中にある。特色はあまり顕著ではないが、岸が侵食崖である。

第六節　九州地方

Akita University

「た地名」が特定地域に集中しているのでその地域ごとに一括して述べる方針で来た。九州地方でも同様であるが、その根拠となる地形の一致という点では、九州を、一括するのは必ずしも適当ではない。下記のとおり、内部に地域差があってまとまっているのであるが、それでは小さく分けすぎて煩雑に思う。よって便宜的に九州を一括した。

さて、九州における「た地名」の分布についてはまだ子細には調査していない（この点、分布の詳細は既述地域についても同様である）が、おおよそ阿蘇山地域より北に多いと言える。分割して言えば、(1)佐賀県西部。黒髪山地域　(2)阿蘇山からの水系地域　(3)耶馬渓・久住九重地域　(4)国東半島　に分けて見られる。この範囲で概観すると、(1)はさほど高い山はないが、山の多い地帯で、山間の複雑な形の平地に水田が作られ、また窯業・温泉が目立つ。(2)は阿蘇火山灰堆積地を川が浸食した地形である。(3)の耶馬渓は、古くは山国谷・城井谷など呼ばれていたのを、頼山陽が絶賛し中国風の名を与えたものとされ、地名は極めて新しい。中国風の名ではあるが、ヤバが大和詞を背景にしていないか、今後の課題であろう。さて本耶馬渓は、成層集塊岩が侵食されたもので奇岩・奇峰の連続である。ただ奥耶馬渓には旧耶馬溶岩や耶馬渓火山の最下部の溶岩である変朽安山岩が淡緑色の岩肌を見せる所もあり、また深耶馬渓は全く別種の新耶馬溶岩の侵食風景で、これは幼年期地形であって、標高約400メートルほどの大溶岩台地に垂直50mほどの狭い侵食谷をうがっている。両壁の断崖絶壁と多くの石柱に特徴がある。

久住（九重）山地は最高峰九重山1,787mに連なり、広い高原をなす。傾斜3°ほどの緩傾斜面で、地質的には軽石流・礫層・火山灰より成る。地形上は、火山扇状地で、浅い放射谷が刻まれている。(4)国東半島は、九州東北部で、伊予灘周防灘の間に円く突き出た半島である。この生成は、中心位置にある両子山720m、文殊山617m、千灯岳606mなどの外、1,600～500m程度の群山があって、四期にわたる火山活動の結果とされる。半島の基盤は片麻岩・花崗岩であるが、両輝[2]石安山岩、角閃石安山岩の礫、凝灰角礫岩などの原層に火山灰砂と互層をなし、更に輝[3]石安山岩の溶岩流噴出や軽[4]石流の噴出を経た。地形的には、各期の噴出の後をうけた侵食があり、中央部は中起伏火山地、火山体斜面は小起伏大山地であり、両子山を中心に八方に放射状に伸びる山稜尾根筋を形成した。尾根の上面傾斜が15°～21°とよく揃っている。輻射谷は切込みが深く長いので、開析が進み、V字谷の底には土砂礫の堆積した谷底平野を作り、埋積谷となっている。火山体の斜面は開析が進んで原表面は全く失われたが、放射谷の配列から円錐火山の地形的特徴はなお保たれている（渡辺光氏説）＝角川日本地名大辞典（大分県）。よく似た開析谷の下部地形に「た地名」がある点に注目される。

一、福岡県

たとえば、福岡市板付など、稲作の先進的地域と目され、水田の意としての「田地名」も少なくないが、前述した(3)耶馬渓の西にあって大分県との境をなす連山（中心は英彦山1200m）の西側は「田川郡（福岡県）」であり、町としての田川市、山田市、添田町などある。

この田川郡の代表的地形は、英彦山西麓を水源とする彦山川と今川が5kmの間隔で約15kmにわたって並行に流れている。その間には英彦山からの尾根筋が続き、その壁は急崖である。そのほとりの添田には岩石山（固有名）があり、これらが「添田」という「た地名」の真意であろう。更にこの下流10kmにある田川市も彦山川に臨み、間の尾根が達している。川と尾根によって形成しているのが田川郡である。実は「田川」という地名はあちこちにあって、代表的な例をみると、山形県の東西田川郡は山形・新潟県境の朝日山地からの川とその間の尾根で形成されている（その中に長峯・尾根の地形をいうアヅチ・アツミ地名がある（本紀要第45集「安土・温海」参照）。

Akita University

もう一つ、先に栃木県宝木について記した（本紀要第48集）が、日光と今市市の間に発し、宇都宮市東部を南流し、南部芳賀郡～小山市の境で鬼怒川に合流するのが田川で、この間、宝木台地の片側を侵食形成した川である。尾根を形成した点、福岡の田川郡と実によく似ている。

二、佐賀県

ア、有田（アリタ）市。佐賀県西部の山間地。陶器の産地として著名。山は極度に風化してギザギザである。風化土は白く、流れによって運ばれ、淀みなどにたまる。これが陶器の原料粘土である。当地のギザギザになった山の形も一見すれば忘れえない印象を与える。兵庫県の「有馬（アリマ）」には「荒れた谷間」説があると同じく、この「有田」の「有」にも「荒」を考えたくなる（第一節和歌山県「有田」参照）。

イ、武雄（タケオ）—佐賀平野を西に抜け、多久地方の南を抜けると武雄に至る。ここまで来て山が険しくなったと思う。鉄道の南側の虚空蔵（御船山）山は、頂が秀でた（287.9mで高山ではないが）山である。上は鬱蒼と樹木が茂っているが麓は岩崖の山である。岩は表面が黒いが中は白い。しかるに同じ崖面のすぐ隣は風化花崗岩か、赤味を帯びている。鉄道をはさんだ反対の北側は、とりわけ頂が鋭く尖った岩の山である。このタケダケしさこそ「た地名」の真意である。

福井県武生（タケフ）は日野川・吉野瀬川に挟まれた尾根筋で、武雄（タケオ）は尾根ではないが、類似地形だと言える。

ウ、多久（タク）—佐賀平野を西に抜けて山（築紫山地）に入ったところに多久がある。小丘陵が果てしなく続いている。流れている川は大きくはないが、水音を立てた落差があり、合流し、その流れを使っての水田が分布している。水田面の高低差が強い。多久は広く、中多久・下多久・東多久・多久原、牛津川を少し遡った所の多久聖廟の付近などに分けられているが、地相は同じである。やはり丘陵・段差・水音など、「た地名」の特色に一致する。

エ、太田（オオタ）　佐賀県鳥栖市

鳥栖市の平坦な市街地を抜け、駅より2㎞北方の郊外に出る。水田、果樹園などを経営する農家が点在する中に、欝蒼とした木立のある人家の庭に太田山古墳がある。この家の前あたりから、水田面が箕・塵取状になって続いてゆく。広島県尾道市郊外の太田と水田面の形がよく似ている。

三、大分県

先に九州地方の「た地名」の分布を4地域に分けて示したが、大分県はその3つの地域を含み、最も激しい起伏地形と言える。「大分」の名も「大きだ（階）」より出たとする本居宣長の説は尤もと思われる。

ア、田ノ平（タノヒラ）・田能原（タノバル）—大分県玖珠町。前記分類の(3)地域。玖珠川沿いの築後街道の平川から北の山手に入ると、まもなく田ノ平。更に奥に登った田能原とともに比高20mくらいの岡が長く続いていて、その岡に挟まれて水田がある村である。田ノ平は崖の意。水田そのものでは崖になりえない。紀伊半島南端の田子に田平があった。崖・岬の側面の急傾斜をさしている。

イ、太田（オオタ）—大分県玖珠町（後記の太田村とは別）。ア、と同じように山手をつっ切って東にまわると太田である。また同じように比高20m程度の連続した岡に囲まれた農村である。中の広さは、前記田ノ平・田能原よりずっと広く、水田になっている。その点では、これらに対し「広大な水田」という意味が当らなくはないが、やはり全体の共通項をとれば、急傾斜面の岡に囲まれている点である。

ウ、宝山（タカラヤマ）—前記してきたコースを東に向うと九重町（中心は恵良）に至る。周囲には麓が急傾斜な椀形（または三角おにぎり形）の山が目立ち、その中で一きわ際

Akita University

立っているのが宝山816mである。さほど高くはないが、中腹部から頂部にかけて岩肌をあらわにして崖をなし、頂部はむしろ緩いドーム型で、ホットケーキにたとえる人もいる。山麓を一周できる道があり、まわりながら見ると、至る所からもり上った岩山の相を見ることができ、既に述べてきた兵庫県宝塚の岩崖、島根県大宝の岩崖・急傾斜山中の相が想起され、宝地名の共通相を確認できた。

エ、国東半島部

国東半島は、そのほぼ中央にある両子山・文殊山・千灯岳などから、八方に川が流れ、その侵食によって尾根が放射状に伸びている。その岸が崖をなしている所は数え切れぬ程であり、尾根の先端部や、それぞれの川口である海岸部（小平地に移行した所）に「た地名」が多い。以下周回しつつ記載する。

a、太田村（西国東郡）　前記中央群山の南。侵食谷数本が流れ下って平地に至った所。よって水田あり。されど地形成立上、上の尾根筋・川の侵食をさし措いては考えられない。群馬・茨城の太田と共通。

b、田原山（鋸山）西国東郡の南西境。この山は特に上部に岩崖面が多く、見上げると鋸歯状に見える。千葉県にも鋸山あり、その麓部に田子あり、ここは田原山であり、田た地名の共通性を見る。

c、諸田（安岐町）中心部の山に近く、安岐川の上流部。深く侵食谷を形成していて西側の岸の上部に諸田集落あり、両岸が急傾斜であることをいう。水田もあり、御田植の祭りあり。

d、真玉町（西国東郡）半島西部海岸。小さな谷を多く含む真玉川が作った地形で、この玉は殆ど谷と言いかえ得る。古墳があり、古くからの生活の歴史がある所。磨崖仏あり。

e、竹田川（西国東郡）半島北西部、香々地町で周防灘に入る。この香々地の意は「カガ・ガギ・カグ・（カゲ）・カゴ」の体系をもつ起伏地の意（石川県―加賀国、奈良天の香具山など）、竹田は大分県南部に「竹田市」あり、侵食谷・尾根の集合地（既述）。

f、向田（東国東郡国見町）半島北東部の海岸。小さいが岩石の岬が海に突き出している。岬の岸が崖である。

なお、c諸田については、別に中津市にも同名の地あり、小国川の堆積によって生じた扇状三角州の扇頂部に当る。標高50m。東方犬丸川に面して数段の河岸段丘あり、土質は大体赤色粘土質。地層下部は砂質。上部に礫層が不整合に重なる（角川日本地名大辞典大分県の地名）。台地上に古墳多く、生活史と地名とのかかわりも注目される。

この外にも大分県には注目すべき「た地名」が多いが、今は省略する。

第七節　静岡県

同一地相の範囲に同じ（または同一体系内の）地名が集中することを根拠に、地域別に述べてきた。ただその例として静岡県を一つにあげるのは、自分のたてた方針に反する。というのは、静岡県は後に述べるように東西で非常に異った地質的成因をもち、地形もそれに伴って異る。従ってこれを一括するのは矛盾である。さて、その静岡県で「水田の意でないた地名」は、伊豆の火山質地域に大へん多いが、しかし西の水成岩地帯にもあり、その点で同県を一括することに別の意義が生ずると信ずる。即ち、当初の方針とは矛盾するが、静岡県に「た地名」が集中していることは確かであるからである。

このように一括する意義を認めるが、静岡県下に「た地名」がないに等しい所がある。それは北西部、長野県との境の明石山脈一帯、及び富士山（これは一岳とも呼ばれたが一一帯である。更に明石山脈・富士山の中間の身延山地あたりも「た地名」は少ないと言える。大井川・安倍川の上流部は険しく侵食しているが、川沿い・合流点などにも平地が形成されていない。前論文（本紀要第48集）から述べてきたとおり、この

Akita University

「た地名」は、山から平地に段差をもって続き、両者がかかわる所にある地名である。

平凡社世界大百科辞典・角川日本地名大辞典（静岡県）などによって、静岡県の特性をみると、

1、北西部の明石山脈地帯は、中央構造線に属し、地質的には古生・中世紀・古第三紀層に当り、花崗岩・変成岩によって成る。荒川岳3141m、明石岳3120mなど概して山は高い。

2、東部はフォッサマグナに属す。富士火山帯・伊豆半島で、新しい第三紀以後の地質をもち、火山である富士山3776mを除くと、火山でもさほど高くはなく、1000m台が多い。

この二地帯が極めて対照的なのであるが、これに属させるのに無理がある地域を示すと、

3、1、2、両地帯の間の海に近い平野・砂丘帯で、その西端は1の南に続き、愛知県に接する。砂丘帯は侵食でかなり複雑な地形をなしている所もある。

さて、これらの地域にどんな「た地名」があるかリストアップすると、

1、地帯―磐田郡をはじめ、小田・下田・南部田・山犬段などあるが、比較的少ない。

2、地帯―田方郡をはじめ、多賀・田野原・下田市・田子・田子野・大滝・丹野・多比など、広さの割に多い。

3、地帯―三島市に田町、清水町に玉川、富士川河口に田子（の浦）、清水市に田町・宝町・富士宮市に宝町・芝川町に向田、静岡市地区に田町・宝町・田ヶ谷、掛川市に丹間・段（村）・菊川町に田ヶ谷・小笠町に丹野・袋井市に田町・磐田市に磐田原、太田川、浜松市に石田町、浜名湖西岸に太田・多米峠（愛知県との境）

もちろん1・2・3の地帯に明確な境界があるわけではなく、3はやや広く見すぎているかと思うが、平地部で人々の生活の場でもあるため、地名も多い。

こうしてみると、むしろ結論に述べるべき事であるが、地学的成因の異ることは「た地名」と関係ないことがわかる。古代人の名づけの根拠には地学的区別より現実的感覚的な特質こそ必要なのだと思われる。

また1の明石山脈高地、2のうち北部（富士山一帯には「た地名」がない。あるのは、山が平地に続く所、段差のある地形の所などで、これらは前論文から述べてきた事と一致している。それらを通じて、地学的成因は異っても、結果的に山・丘陵から段差をもって低平地に続くところに「た地名」があり、静岡県下では成因の違いをのりこえてこの名がありながら、一級の山間地にないというような、極めて明瞭なあらわれ方をしている点に、尽きない興味を覚えるものである。

さて、右にリストアップした地名に同名のものが、別の所にある例がある。便宜上これらはまとめて説明することにする。また、前論文からとりあげてきたのと同じ地名は落さないようにしたい。この日本の地質の縮図とも言われる静岡県の例も他と同一であることを確認することに大きな意義があるからである。

静岡県内に、課題の「た地名」で同名のものが多い。県内で位置は離れていても、これは一括して述べる。

〔田〕

1、田町（タマチ）

ア、三島市。伊豆国君沢郡のうち。狩野川の支流境川中流左岸にある。ただし江戸期から明治22年までの町名。

イ、清水市。昭和14年からの町名。もとは大字辻の一部。昭和48年、一部が宮下町・矢倉町にそれぞれ編入。

ウ、静岡市。大正13年からの町名。もとは安西。安倍川沿い。

エ、袋井市。昭和49年からの町名。もとは大字久能の一部。

オ、浜松市。江戸期から明治22年までの町名。遠州灘に注ぐ馬込川の

Akita University

支流新川流域に位置する。

以上、大方平地部なので、水田がある（あった）所である。しかし、すべて全く平らかな所ではなく、崖状の段差を含んでいる所にある。

2、田方郡

伊豆半島中央部から北部にかけて位置する。古代からの郡名。和名抄に「多加太」（刊本・東急本とも）、延喜式の神名帳・民部式に「タカタ」のふりかなあり。伊豆国は山岳が連り平地が狭いが、中部から北部にかけての狩野川流域には平地があり田地がひらけているので、田方の名があるという。

しかし、タガタの地名は鹿児島県末吉町・牧園町に同じ「田方」で、愛知県小牧市には「田県」で、福岡県立花町には「田形」がある。鹿児島の田方は、いずれも霧島山の西・南の麓にあり、火山灰が険しく侵食された所。愛知小牧の田県は東北方4㎞余の本宮山293ｍから続く尾根の先端部で、南・西は平地（水田）に続く地形である。福岡県立花町は南側の肥後山地からの斜面の下にあり、一口に言えば谷に臨む地形である。これらと考え合わせると伊豆の田方も、狩野川に落ちる多数の支流が谷状であることによると見るべきである（下流に田があるのは結果）。

3、多賀　熱海市。市の南部。半島東海岸であるが、熱海のアタは本紀要第45集に説いた所で、その要点は、「長峯・尾根など、特にその末端部に当る地名である」ことである。当地名は体系的で、アタ・アチ・アツ・アテ・アト（及びそれらの濁音形）をもつ。隣のタガも類似地形で、背後の山から尾根・谷筋が出ている点など、これまた既述した滋賀県犬上郡多賀町、兵庫県一宮町多賀と全く類似の地形である。なお、茨城県東北部の多賀郡は阿武隈高地の最南部で、渓谷もある侵食帯であるし、宮城県宮城郡多賀城の地も、起伏の多い、侵食の強い所である。こういう相は伊豆の多賀にも合致している。

4、田子（タゴ）

ア、富士市。富士川河口。万葉集以来歌枕として有名な所。

田子の浦ゆ打ち出でてみれば真白にぞ
富士の高嶺に雪は降りける
（三―三一八　山部赤人）

さて、この田子（の浦）ついて、古代と現在とでは位置が違うとされる。即ち、今は富士川河口の東側を田子の浦と言い、その中の潤井川河口近くに田子という地名もある。富士川河口は三角州状だが、地形は相当の起伏をもち、富士川派流も不規則に流れる。

しかしながら、古代の田子の浦は、富士川河口の西、蒲原、吹上の浜の方であるとされる。

いずれが真に田子であるか？筆者は、一カ所だけで決着をつけようとするのは誤りであると思う。先の多賀についても他地域の同名地との共通相を確認したとおり、田子についても比較せねばならない。

イ、西伊豆町。半島南西部海岸。笠蓋山699ｍから続く二本の尾根に、北側と東～南側を囲まれた中にあり、東側の多賀（先述）によく似た地形である（地名もタガ―タゴ同一体系）。

さて、このタゴを同地名（同一体系地名）との共通性において正当に解するためには、もっと多くのタゴ地名と比較せねばならない。実は既に本紀要第38集に「タカ・タク・タコ…」を論じたことがある。要点を示すと、これらの地名の共通的地形は背後に急傾斜・崖を背負い、川水の流れはさか巻き水音を立てている。（タキ（滝）が、この地名体系に入っている）。このような相こそタゴである（タカ…タコと濁音形のタガ…も同一体系）。

なおタゴは、東北一帯に同系地名が多くタッコ（田子・達子）・タゴ（田子）・ダンゴ（駄子）などあり、滝状の水流を伴った急傾斜地、または降雨後特に滝状になる所であって、完全な一致をみる。

Akita University

その点、アイヌ語のタプコプ（たんこぶ）であるとする山田秀三氏の説（『東北・アイヌ語地名の研究』）は全体には一致せず、しかもアイヌ人からみて「たんこぶ」というなら大和語ではないかという疑いあり、筆者は賛意を持つことはできない。

5、磐田（イワタ）―天龍川流域に位置し、長野県との境に近い部分から遠州灘地方までの広い郡である。古代、霊亀元年五月に地震による山崩れで麁玉川がせきとめられて、石田郡を含む広大な土地が水没した被害記事がある（続日本紀）。この「麁玉アラタマ」というのも「た地名」に位置づけられるものと思うが、川岸の台地上には古墳時代からの遺跡があり、古墳群も多く、古くからの生活の歴史を示す。「アラタマ」はこの川が暴れ川であった名であろう。

さて磐（石）田は、郡としてみれば広く、北部山間地帯と南部低地地帯とでは地相が非常に異るが、代表を磐田原にとって示す。

ア、磐田原―天龍川左岸、低地部で磐田市街の北。尖った扇形で西境界が天龍川の支流、東境界は太田川。天龍川の東、太田川の西には南北に尾根筋（川に平行）あり、洪積台地で北端は標高125ｍ（豊岡村神増）。南部は沖積平野に続く。地質は天龍川対岸の三方原台地とともに古天龍川による河床堆積物の礫地である。

地形は本論文で特に注目される点であるが、角川日本地名大辞典（静岡県）によると、台地上は多数の南北性の谷に刻み込まれて切断されている。主な谷は加茂川・中川・安久路川の刻む谷と幕ヶ谷がある。谷底は平らで、上中流は畑、下流は水田となっている。台地とは急斜面で、隔てられている。とあって、「た地名」は急斜面と考えてきて事と一致する。

6、太田（オオタ）―湖西市太田。愛知県との境に近い山中から東流し浜名湖に入出太田川が流れ、その下流部に当る沿岸にある。それは、一つの張り出した台地で、先端は浜名湖に突き出た正太夫鼻（突端に54ｍの宇津山がある）である。縄文期の太田遺跡、奈良期の古窯群などがあって同じく生活史の古さを示すところで、急傾斜で特色づけられる地相をもつ。

7、太田郷（オオタ）―平安期の郷名で、和名抄によると遠江国周智郡五郷の一つ。比定地は遺跡地のある現在の袋井市大字太田を中心とする一帯とする説と、現在の森町大字森を中心とする一帯とする説とがある。いずれにせよこの一帯は北北東方向から延びている尾根筋に当り、その尾根を挟んで原野谷川、吉川があり、谷を形成している。この原野谷川上流に、後述する「丹間」がある。

総合的にみるとやはり太田郷のあった所は、尾根・谷がかかわった急傾斜、侵食崖が平地に移行する所と見られる。

〔丹・段〕段は丹の濁音形として。語頭濁音形とみるべきものは、「玉（タマ）―ダマ。ターダア。岳タケ（タケ）―ダケ」などあった。さて「丹（タン）―段（ダン）」が対応するとして、しからばその意は何か、というに、「谷」と解する。その一証として掛川市原野谷川上流左岸の谷あいに「丹間（タンマ）」があり、その地名は「谷間」の意と解されている。静岡県下にある「丹・段」は永年の地形の変化を考慮に入れれば、みな「谷」の意と解しうる。

ア、丹間―前記

イ、丹野（タンノ）―小笠町。牛淵川支流の丹野川上流部左岸にある。

ウ、丹那（タンナ）―伊豆半島の付根部。熱海と三島の間で、田方郡に属する。柿沢川上流に位置する山間の村である。地質は火山性で複雑かつ有名な断層があり、その断層運動によってできた小盆地がある。古くは池であったという。東海道線の丹那トンネルが通っているが、この地質のために、大変な難工事であった。

エ、段（ダン）村―掛川市。江戸期より明治初期までの村名。上小笠川上流に位置する。今は上内田村。

オ、段間（ダンマ）―伊豆半島東南部、河津町見高字段間。相模灘に舌状につき

Akita University

出た標高40mほどの海岸段丘上に、縄文中期中葉～後葉の段間遺跡がある。

〔宝町〕タカラマチ

ア、宝町―伊東市。昭和45年よりの新しい地名であるが、もとは大字岡の一部。やはり急崖の上。

イ、宝町―清水市。昭和47年からの地名で、もとは柳町、紺屋町、魚町、小芝町の各一部。

ウ、宝町―富士宮市。昭和41年からの新しい地名で、もとは大字大宮、淀師の各一部。

エ、宝町―静岡市。昭和7年～20年の地名で、もとは大字川辺の一部。昭和20年に、昭和、常磐、紺屋町となる。

〔玉川〕タマガワ

ア、玉川―清水町。境川右岸。「駿河志料」に「水清冷にして玉の如し。故に玉川と云」とある。崖地であり侵食地形である。

ここに縄文晩期・弥生後期およびそれ以後の玉川福泉寺遺跡がある。

イ、玉川（玉河とも）―三島市。狩野川支流の境川左岸。地内の玉水の池から流れ出る玉川にちなむという（増訂豆州志稿）。ただし鎌倉期から見られる郷名で、伊豆国田方郡のうちである。玉川にちなむとすると玉川のガケ・水音に因むことになる。

静岡県下の「た地名」課題語はまだあるが、既に紙数を越えているので、この辺で打ち切って、結論を述べるとともに関連ある課題をとりあげよう。

結論と関連課題

全国的に分布する多数の「た地名」を地域的共通性のもとにまとめて記述した。ポイントになる「田」は、水田（の存在）とは必ずしも結びつかず、むしろ川の岸や床に岩崖や段差などがあって水音を立てている点に特徴がある。太田と小田は大小が対応した地名であるが、壁面があって水音のある小田、または水流は顕著でなくとも急傾斜・段差のある小田が特徴的である。それに対して太田は、尾根筋の先端部または尾根・台地の壁面が落差をもって低平地に続いている所にある。この尾根・台地を挟んで川があり、その川が尾根を形成したケースでは下の低地はその上の尾根筋から生じたと言うべきものもある。

田（た）の意味は、とかく水田に引きつけられる。しかしこのように崖や段差が多いのはなぜであろう。崖と水田との関係いかにが課題である。

第一節　水田をタと言わない例について

一、クエ・クイ

「水田でないた地名」について考えてきたが、これは「水田をたと言わない例」と関連して見るべきである。

「日本言語地図」によって、田（一枚・多数枚）の表現を見る。幾つかの代表形があるが、「た」の名に直結すると考えられる単純形を拾うと、「チャ・チャー・サー」（日本言語地図の解説でも、これらが田（た）の変形であると解説されている）があり、このうち「チャ」には下に「―バル・―バリ・―バー・―バ（いずれも原か）がついた形がある。これらの分布は、中国・九州（奄美を含む）・沖縄に限られているが、「チャー・サー」は一音節語を長音に言う西日本型の発音にも一致する。

この外、水田をたと言わない例」の単純な語形に「クエ・クイ・キレ」がある。これらは先の「チャ・チャー・サー」とは発想の異なる別の表現と思われる点に注目される。そしてこの三つにおいて「クエ・クイ」の二つは母音が僅か変化したに過ぎない同語であるが、キレはまた別であると思われる。

Akita University

田をクエ・クイという例について辞典等で詳しい説に接しない。しかし解明につながるものとして日本神話が想起される。荒筋は、

大国主神の支配する出雲の海岸に小人神が漕ぎ着いた。大国主神はこの小人神の素姓を知ろうとしたが神々は誰も知らない。谷グク（ひき蛙）が言うには「クエ彦がきっと知っているでしょう」とのことで、そのとおりクエ彦が「これは少彦名神である」ことを明かした。（古事記）

というのである。更に古事記には、クエ彦というのは「今は山田の曽富騰（ソホド）という」また「この神、足は行かねども盡に天の下の事を知れる神なり」とあって、これらからクエ彦とはカカシの事だと解されている。後世の解釈では、カカシはボロ（衣のクエたるもの）をまとっているからであると解釈していると思われる。

ところで、この崩壊（クエ）は地相をも表していて、「ガケ崩れ・土砂崩壊（そうした所）」をいう。日本国語大辞典（昭和48年）に、

動詞「くえる（崩）」の連用形の名詞化。山から土や岩などがくずれ落ちること。改正増補和英語林集成「Kuye クエ　潰」。

とあり、更に方言について、

山くずれ。奈良県吉野郡、徳島県、高知県。崖。長野県南佐久郡、熊本県八代郡　　グエ、三重県北牟婁郡。

を示す。これらによって、全国的ではないながら、長野県以西にクエ・グエで崖・崖[10]くずれの意に使う所が多いと言える。これが明かになったからには、筆者は「水田の意につながった」と思うが、従来はまだそこに結びつけて考えられなかった。

さて、日本言語地図4（昭和59年）に、「水田（一枚）」の意に、

クエ（広島県双三郡。島根県江津で日本海に注ぐ江川中流部山中）。

同じく「水田（複数枚）」の意に

クイ（島根県邑智郡羽須美の付近。前記の江川中流部山中である点は同じで、前のクエとは15㎞とはなれていない。）

を示す。（マークの位置で解される）

先に「サ行音語頭自然地名の一研究」（本紀要第47集）で、『スサノヲ神はスサ（荒）の神であり、その現れとして土砂崩壊を起す』これは従来も言われていた事である。しかし更に先があって、崖[10]の麓に土砂崩壊した土は水・川の作用で下流に運ばれ、細粒となって堆積する。それが水田として利用されることは、島根県佐田町須佐およびその上流部の山中の地質・地相で明かである。即ち上流の山の崖崩壊は下流の低平地の生みの親なのであり、現にスサノヲ神の祀られている須佐を流れる波多川・神戸川の（斐伊の郷）下にはスサノヲの娘スセリ姫がいたという伝説がある（出雲風土記神門郡）」ことを述べてある。

これに類するコンビは、猿田彦神（崩壊相を表す）と娘・太田姫との間にも見られる。水田に好適な細粒の軟い土壌が山麓から下に沖積する過程があらわされている。

以上のように考えてきた筆者にとって、「クエ・クイ」（潰）が水田の意になることは何の不思議もない。

普通に言えば「水田が崩壊の意につながる」ことは考えにくいであろう。あぜは、水をたたえるための縁であると共に、水田の崩れを防ぐためのものである（通路にも使われるが）。崩れを防ぐくらいであるから「崩壊」という意味とは結びつけにくかったであろう。筆者が、土砂崩壊が水田に密着すると考えるのは、崩壊しては困るという意味ではなく、前述のとおり「崩壊土砂がその後の水流・川の作用で低地に溜って水田に好適な土地が形成された」という意味においてである。

クエることが水田を作ったのである。そうしてみれば、「クエ」がそのまま「水田」の意の名になる。これは生成母体の名をもって名とするという最も根源的な名づけ方法である。

Akita University

二、キレ

水田を「タ」と言わない例で、もう一つ注目すべきものに、同じ「日本言語地図4」において「キレ」が見出される。これがあるのは、

島根県邇摩郡
高知県幡多郡（四万十川沿岸）
東京都伊豆八丈島

である。この島根県邇摩郡の位置は、先にクエで示した広島県双三郡、クイで示した島根県邑智羽須美と、それぞれ40㎞も離れていない。

このキレは何か。布について言うことが多いが「片」の意で「クレ（土くれ）」と同一の体系をもつ語であろう。この想定が正しければ、これまた土砂の崩壊につながり、先のクエ・クイに近い表現であることになる。

ここでもう一つの結論がえられる。先述の「クエ彦」は、同じく「かかし」と考えるにしても「衣服がクエ（潰）ているから」と考える必要はなく、「クエ＝水田」で直接「田彦」と解釈できるのである。

このクエについて若干補足する必要がある。古事記のクエ彦の表記は「久延毘古」で、この延はヤ行のエに当る。しかるに地名において、たとえば出雲地方、先述のスサノヲ神を祀る須佐地方の川下10㎞ほどの所に、「立久恵峡」という景勝地がある。激しい侵食から残った部分が柱状に立っている景は一見すれば忘れ得ぬものだが、「立壊え」と解するにはエに当る字が恵で、これはワ行のゑである。これでは「久延毘古」と同一には見られない。しかし、音声的には「ヤ行エ―ワ行ヱ」の区別は、鎌倉―室町期の頃には区別を失ったから表記の区別は積極性を失ったし、それより早く地名では「嘉字二字を用いよ」の令が出されていたので、恵が選ばれた可能性がある。

「立久恵」も本来的には久延と考えたい。

結びに、

「田地名」にこだわって検べた。「水田でない田地名」という課題は、「坂でない坂地名」という課題と似ているが対照的でもある。日本人は永らく米食をし、水田の恩恵を受けてきた。よって水田の意味での田地名が多いことは当然であろう。しかし、そうではあってもなお「水田でない田地名」という観点での研究は必要である。調査してみて自ら喜びを覚えるのは、「水田ならざる田地名」は「水田の成立過程を示した、水田に密着した地名である」ことが判明した点である。

収め切れなかった所も多い。岩手県下閉伊郡田野畑（畑）、秋田県鹿角市田郡、秋田県五城目町田町、山形県飽海郡湯ノ田、山形県米沢市太田町―東北地方だけでもこうである。

先に「サカ・サク・サコ等」を論じたとき、たとえば「大阪（坂）」など、「広い低平地をサカというのは、上流山地の麓から堆積が進んで行って―即ち坂が延びて行って―全体がサカと言われるようになった（ただし、このサカは傾斜地の意より崩壊した細片シャク・ジャクの意として）、この成立過程を含んだ地名である」（本紀要第38集）と考えた。しかし、少なくとも数千年の経過を含むことに、我ながら不安を覚えざるをえなかった。しかし、今回サカの語根サと対応する「た地名」において、同じく成立過程を含むと考えざるを得なくなった。細部はともかく過去の論文（本紀要第38集）にも自信を得た。

現実に「た地名」の例は多い。更に実例を整理し、もっと明晰な表現で述べるように心がけたいが、今回は以上にとどめることにする。